

要旨

目的：日本に住む難民女性のリプロダクティブヘルスの向上を目指した健康教育プログラムを開発し、プログラムを評価すること。

方法：日本に住む 15～49 歳の難民女性を対象とした、月経・妊娠、避妊法、性感染症、陰部の清潔に関する内容を含む 1 日完結版のプログラムを開催し、その前後で質問紙を実施した。アウトカム評価では、知識（14 項目）、認識（4 項目）、自己効力感（General Self-Efficacy Scale）、自尊感情（自尊感情尺度）について、参加前後に質問紙で尋ね、プロセス評価では、プログラムの実施・内容について参加後に質問紙で尋ねた。参加観察については記述データを得た。

結果：研究協力者 17 名、うち分析対象者は 7 名であり、平均年齢 41.00 歳、平均在日年数 13.29 年、全員が東南アジア出身であった。参加理由は、女性の体や病気について知りたいという内容が多かった。アウトカム評価における知識の項目を分析した結果、合計点の平均は 8.43 点から 13.00 点に有意に上昇していた ($p=0.001$)。項目別で正答率が有意に上昇したのは、【排卵日の特定】 ($p=0.031$)、【緊急避妊法の効果】 ($p=0.031$)、【膣内洗浄の是非】 ($p=0.016$) であった。認識では【コンドームを使うつもりがある】 ($p=0.038$)、【コンドームを正しく使うことができる】 ($p=0.041$) の 2 項目で有意差が認められた。自己効力感はプログラム参加の前後で有意差がみられなかったが、自尊感情は有意に高くなっていた ($p=0.004$)。プロセス評価については、日時、場所、所要時間についての満足度は概ね高かったが、実施回数や参加人数については、約半数が「少ない」と回答していた。プログラムで興味深かった内容については、コンドームワークや病気の知識についての回答が多かった。ワークは過半数が「よかった」と回答しており、使い方や有用性への理解が示された。プログラムの感想は、プログラムの有益性についての回答が見られたが、未婚女性には適切な内容ではない、という意見もみられた。参加観察では、集中して説明を聞きメモをとる者や、個人的な相談をする者もいたが、コンドームワークに参加しない者もいた。

結論：本プログラムにより、難民女性の知識が増加し、コンドーム使用に関する認識がもたらされ、自尊感情が高まったが、自己効力感は向上しなかった。今後の課題として、参加者のニーズに合わせた回数の設定、参加者のリテラシーを考慮した質問紙の作成、ピア・エデュケーションによるプログラム実施を視野に入れること、プログラム実施の数ヵ月後に長期的な評価をすること、以上 4 点が見出された。